

**通信
向井孝**

Kou Mukai
SAHIMAÇI ABENO OSAKA

Ela; Kou Mukai
2-12-2 ASAHIMACHI ABENO O SAKA

27 Jan. '84 No. 275

大阪市阿倍野区旭町2-12-2

N-TO. 275

通信
向井春

二

▼ 由年一月廿日となく集まつて、
去年一月廿日、一月廿日はのこつたくはりやう
が『黙審にしやべる。81年は例のへれど「事件」、82年はぐもんじゅヒヤリング念
仙行くべラハラ大集会』、さて83年は「とじう」と、あまりとりだてたことがない。
で、84年はモツトニマメに動かんとアカン。これ、という機会をとけて、はつと
腰斬るに立てる一袖出鬼設まるべく都市ゲーランのやうに「とじうのが、毎初の詔
となつた。さて85年元旦には、「とくな」とが列挙でやるやうか。
△ 83年をぶりかえると、始元節の節目の一つとなつた
耳とう氣をす。①え自20數年じて姫路の城を對整理、荷物の大山に移したのをきつあけに、大山で
丹波(1ヶ月のわざ)をすと、うま運びえがはじまつたこと。②3月、大森越前守、後、前路、

山川考に付く



講まには、
運動についての
ノート②



3 本邦と世界

⑧ 前号の末尾で、一詩の阿吽性の問題に、一後者へぞたく、
詩法)では、読み手の参加と共に作業、詩の大衆化の方向
へと広がることである。二小川三。これまで、詩の多義、多義

「語はる所へおどれる」などと云ふ。

運動と一般市民、大衆との関係である。
(一月24日)
だから運動の中で、ぼくが意図的にやこううとしてきたことは、まず、まるつきり運動家たちのものとなつてくるへ
運動のスタイルやすゝの方、運動についての考え方について
このワクをとつぱらうこと。つまり既成既往の運動觀から
とび出して、運動の外側から改めて運動へと入つていつて
新しい運動のスタイルとすゝの方を創り出そう、といふも
のだつた。

もつと実際に感じていえば、ほくそつての運動仲間は運動ズレしていない、運動に無縁でもしろ運動なんかイマヤというふくんな感じか。ふつうの感覚の市民たちが、

うとした領地から、ちよつと集りなどをせいたのが第一
なり。一風変つてて何となくおもろくて、自分の云ひ方
いことが出来る、あまりムズカシイリクルなんからイランの
やな、本音でやればエエンやなーといふところから、じつ
のまにか入りこんで、へ運動へをやり出している。「へエー
これが運動かア」といつた人たちは、アーティスト
そこではもうへ運動へは誰の事でもなく、自分のため
になつてしる。たまにへ運動へがうまいから、へ運動へは大家の笑葉
といつてゐる。たまにへ運動へがうまいから、へ運動へは大家の笑葉

⑨ これと同様に、ぼくがへ詩くべき問題とする。

日常の問題を取扱うものでありますから、大體の日常性、ひ

いわゆる「運動」もまた、詩と同様といわねばならぬ。運動と大衆との分離、あるいは歎絶は、それがきりやめて

にとて、全く無縁のものとしてある。その無縁さは、たゞ
とえば、他の文芸ジャンル、いわゆる「小説」とよばれるものと大衆文學の關係以上に距離がある。というよりは断絶に近い。

⑩ いわゆる「現代詩」は、(全人口の1%にもなるかに及ばない、ごく一部特殊の人々を除いて)、多くの人たちにとって、全く無縁のものである。その背景とは、二

つまりとは待つてない人用ちとしうごとである。
もつと云々ば、やはり、その机卓の周辺にあって、たま
にま出合つたへ大衆)といふのが、ほくの詩の共幼者だ。

にかかるの意見、詩觀、運動觀をもつてゐる。そこで一
ぼくがここでいう一般市民、大衆は、それらの意見を、は

度までに肥厚すると、やせり五万ぐら二から五〇万(見方にはうそは無)だろ。((全人口の1%にはるか及ばない))つまり彼らの人口は、詩について、運動について、な

水の母うみ) が止く運動) の聯合、連合はのみ
手とじうたせばなく、血中の毒に毒ふたりとがあるといふ程

で区分するかはむずかしい。
たとえば詩をよむ人口は、きびしくみて五万、最大で五十
万ぐらじどううか。(ちみせでかせ)といふべし。一九三十六年

一般市民、大衆、との關係——といふ事である。

「うの外じゆて、こわば西翁の筆端也
界から、改めて自分流の「詩とは何か」を創つてじくと
きのまゝと、(無分をもとのはかに舍て) 読者としての

は、(詩とか)一度は詩人の見成する
といふのではなく、いわゆる詩的概念の